



農民達 1942年

小川原脩展

# 戦時下の画家

—小川原脩の戦争を考える—

Painter in Wartime: Reflecting on Shu Ogawara's War

2025.10.4 Sat - 2026.1.18 Sun

小川原脩記念美術館 第2展示室

開館時間 / 9:00~17:00 (入館は16:30まで)

休館日 / 毎週火曜日、展示替え休館 (12月8日-12日)、年末年始休館 (12月29日-1月3日)

観覧料 / 一般500 (400) 円、高校生300 (200) 円、小中学生100 (50) 円

( ) 内は10人以上の団体料金、観覧会初日 (2月11日、3月4日) は観覧無料

後援 / 北海道新聞社 倶知安支局

小川原脩記念美術館  
Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006 北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1 (0136-21-4141)  
<http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/>

# 忘れてはならない記憶が、ここにあります。

小川原脩は1911年に倶知安で生まれ、19歳で東京美術学校へ進学しました。画家として歩み始めた東京時代の終盤、太平洋戦争が開戦し、本人も旧満州や中国南西部へ複数回にわたり戦地へ赴きました。特に1944年には、陸軍報道部の従軍画家として激戦地に派遣され、鉛筆や水彩によるスケッチを描きました。その数は160点に及び、戦後は〈戦争のリアリズム〉と呼び公開を決意した資料群でもあります。

2008年夏、当館は小川原の意思を尊重し、その公開を受継ぐ形で戦地スケッチの一部を展示しました。15年後の2023年には、北海道立近代美術館との共同研究を契機に、戦地スケッチ全体や戦時下の小川原の活動を改めて検証する展覧会が実現しました。

戦後80年を迎える本展では、戦地の体験に加え、時代の要請に応えた制作の背景をしめす資料にも光をあてます。画家が戦時下をどう生き抜いたのかを紐解き、共に考える機会としたいと思います。



「無題(ナルシスのリメイク)」 1940年



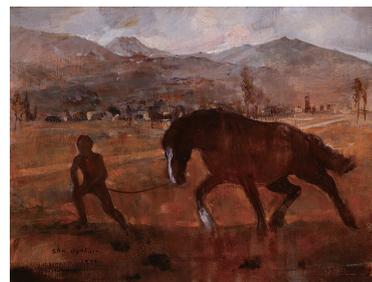
「北海道移民史」 1943年



「北海道移民史」 1943年



「農民達」 1942年



「晩秋」 1945年



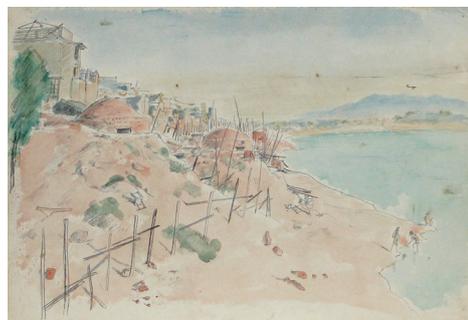
戦地スケッチ「B24 20機の爆撃を受く」 1944年



絵葉書「秋」 1942年



絵葉書「馬鈴薯の供出」 1944年



戦地スケッチ「湘江畔のトーチカ」 1944年



従軍中のスケッチブック 1944年



小川原脩  
1911-2002

北海道・倶知安町生まれ。旧制中学(現・倶知安高校)で油彩を始める。東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学。在学中に「納屋」(1933年)が帝展に入選。卒業後、福沢一郎らと出会い「エコール・ド・東京」「創紀美術協会」「美術文化協会」などの結成に参加。シュルレアリスム絵画への道を歩んだが、軍の規制が厳しくなり断念。その後、軍の命令により戦争記録画を制作。

戦後は郷里・倶知安に戻り、岩船修三、木田金次郎らと「全道美術協会(全道展)」の創立に参加。1958年、野本醇、因藤壽、穂井田日出磨らと「麓彩会」を創立。1975年、北海道文化賞受賞。1994年、北海道開発功労賞受賞。この年、小川原脩画集(共同文化社)を出版。

戦後、倶知安町に定住してから半世紀以上、新たな造形の可能性を求め続けたが、とりわけ70歳を目前にして訪れた中国、チベット、インドでの体験を契機として創作の新天地を拓いている。

●同時開催.....

## 第67回 麓彩会展

2025年8月30日～12月7日(日)

## 小島英一展

2025年12月13日(土)～2026年3月29日(日)



小川原脩記念美術館

Shu Ogawara Museum of Art

〒044-0006 北海道虻田郡倶知安町北6条東7丁目1(0136-21-4141)  
http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/